

八木健に学ぶ滑稽俳句 8

高橋 素子

うしろすがたのしぐれてゆくか 種田山頭火

咳をしても一人 尾崎放哉

世は山頭火ブームである。ブームと言うよりも、社会現象といった方が正しいのかも。放浪者のロマンティズムと民族的な甘さが大衆的な人気につながっているようだ。

しかし、俳人の中には、放哉の方を高く評価する人も多い。山頭火と放哉、共に、裕福な家に生まれ、トップレベルの教養人。にもかかわらず、二人とも家を捨て、大酒飲み、晩年は共に寺男となり、放浪の果てに死ぬ。破滅型の人生である。

掲出の句は「短律俳句」の極致とも言える山頭火、放哉の最高傑作である。

山頭火の句は、青々とした時雨の中に溶け行く旅人の後ろ姿の構図や言葉の流れの美しさ、謎めいた終わり方…、自己愛の強い自嘲の句である。しかも自嘲が単なる観念に終わらず、詩情として昇華されていると言われている。

放哉の句は、わずか九音字の短律表現の中に、無限の孤独感が感じられる淋しく哀しい句である。元の句は、「月夜風ある一人咳をして」で、こ

の句の余分なものを削ぎ落とし、弱々しい咳の余韻が、いつまでも残るような名句となった。

「俳句は省略の文学」と言われるが、師・八木健にも平成の山頭火になぞらえた自由律の句がある。

のどのおくまであきかぜ

赤とんぼゆびをはなれる

師に俳句の過程をたずねてみると、当初は「のどの奥まで秋風を入れてみる」としたが、その後「奥まで」があれば「入れてみる」は不要。更に推敲を重ね、平仮名だけにすることで、より面白い自由律の句になる事に気付いたと、説明された。

同様にとんぼの句も、「赤とんぼ人差し指を放れけり」と、当初は作句。止めの文語体の「けり」を口語体の「る」に直して自由律の句にと、師は語る。

山頭火・放哉、ふたりの師である荻原井泉水にも「自由律俳句」をみてみよう。

棹さして月のただ中

荻原井泉水

月光に解く鍵束の知恵の輪を

八木健

井泉水の句は「月光のただ中」とせず「月のただ中」としたところに、まるで月の世界を漕ぎ行くような俳諧的な諧謔をもった句となっている。井泉水は、関東大震災前後に相次いで家族を喪い、その不幸を契機に、旅から旅の生活をするが多くなったが、その旅の中で、季題や十七音字の制約をはずし、自由なリズムの句を多く作るようになったと、言われている。「月」は秋の季語であるが、ここでは、あえて無季の句としたい。

師・八木健の句は、帰宅して沢山の鍵の束の中から、玄関に合う鍵を捜している。澄んだ秋の月の光の下とは言え、夜の静寂の中、昼間の疲れも出て、なかなか見付からない。その姿はまるで、懸命に知恵の輪を解いているようにさえ見える。想像するだけで笑えてくる。

今少し、井泉水と山頭火の句を見てみたい。

わらやふるゆきつもる

荻原井泉水

雪催降るか降らぬか煮え切らぬ

八木健

掲出の句は井泉水短律俳句の代表作と言われる十音字のかな書きの句である。かなの一つ一つが雪片であるかのような感覚さえ覚え、一音一音の移りゆくリズムが自然で、作者の人間的まろみがよく出ている名句だと、評価も高い。

師・八木健の句は、どんよりと曇って今にも雪が降りそうな「雪もよい」の空を「煮え切らない」という面白い言葉で擬人化。どっちつかずの態度で、はっきりしない空模様を詠んで、滑稽句の佳句となっている。

ほろほろ酔うて木の葉ふる

種田山頭火

肩に頭に降らせ放題木の葉雨

八木健

土砂降りとなつてしまひし木の葉雨 八木健

掲出の山頭火の句を激賞して、井泉水は「こういう句こそ山頭火の真骨頂というて然るべきである。ほろほろ酔うたものが木の葉なのか、ほろほろと風に戯れるものが己なのか、彼であり且つ我であり、我であり且つ彼であり、実に渾然としたところに帰入している物心融合の妙境である」と。

師・八木健の一句目は、肩に頭に木の葉が、雨の様に降る情景を面白く句に詠んでいる。二句目は、更に木の葉が土砂降り状態になった時の情景である。「木の葉雨」を木の葉の降る頃の雨と勘違いしている人がいるが、雨のことではなく、雨の様に木の葉が降るさまを言いますと、師匠。

私も、師匠に倣って詠んでみる。

頭に木の葉乗せて社のお狐さん

素子

「ちょいと！お姉さん！」と呼ばれて、振り返れば、素敵な若者が…。頭に乗った病葉の所為でしょうか？化け損ねて、尻尾が…。昔、狐は頭に木の葉を乗せて化けると、聞きました。